

子育て・暮らし重視に 新年度予算で、末松市長と意見交換

1月31日、共産党鈴鹿市委員会として毎年行なっている予算要求に対して、末松市長からの回答を受け取り、意見交換を行ないました。懇談の中では、市長から前向きに取り組む考えも示されました。末松市長からの回答の主なものは、下記のとおりです。

生活交通（コミバス）の市内全域への拡大は、具体的に実証実験をできるようにしたい。

亀山市と広域で行なっている介護保険を、鈴鹿市単独で運営できるように、亀山市と話し合っていきたい。



なごやかに市長と意見交換

学校トイレの改修方法を、メーカーの提案も取り入れて進めようとしている。

学校図書館の巡回指導員を、他市並みに週1～2回に増やす。

消防職員数は現在202人、条例定数215人充足をめざす。女性職員も増やしていきたい。



回答書を受け取る、森川・橋詰・石田・高橋

市議団は、子育て支援を重要施策として進めようという末松市長の姿勢を評価しつつも、国民健康保険料の均等割（子どもにも1人約4万円）をなくすこと、学校給食費を多子世帯から段階的にへらすことなど、いま出来ることに着手するよう求めました。新年度予算は、2月12日に議案として提案され、19日から開会する市議会で審議されます。

商工会議所・JA 鈴鹿など団体訪問

1月23日、共産党議員団 + 高橋さつきで、市内の各団体の事務所を訪問、ごあいさつと懇談を行いました。おじゃましたのは、鈴鹿建設労働組合、鈴鹿商工会議所、JA 鈴鹿、鈴鹿民主商工会、(医師会、歯科医師会のごあいさつのみ)でした。



JA 鈴鹿の専務さん・常務さんとの懇談

各団体とも、中小零細業者や農業者、職人さんの仕事と生活を守るために頑張っていることが、よく分かりました。こちらからは、大企業やアメリカ言いなりのアベ政治の問題、消費税増税をストップするための共同などを訴えました。また、共産党の政策や理念についての質問などもあり、多岐にわたって意見交換を行いました。

県議選・市議選躍進！新春のつどい

1月19日、文化会館さつきプラザで日本共産党鈴鹿市後援会「新春のつどい」が行なわれました。4月の地方選挙で、鈴鹿から県議に森川ヤスエさん、市議には新人高橋さつきさんと現職の石田・橋詰で3議席をと訴え、また参院選挙区の中川民英さんも決意表明しました。

衆議院議員のもとむら伸子さんが、迫力ある国会報告。共産党国会議員団の値打ちを、分かりやすく語っていただきました。また、県知事選に出馬する



る鈴木加奈子さんも、迫力あふれるあいさつ。会場いっぱい、元気な女性パワーがあふれました。

文化行事は、「コスモス」のコーラス、見事な津軽三味線の19歳・伊藤圭佑さん。そして、豪華賞品の福引きなどで、大いに盛り上がったつどいでした。

ブロック塀の除却工事への助成拡大

古いブロック塀が地震で倒れる危険を避けるための撤去工事への助成金の対象が、4月から広がります。これまでは「セットバックが必要な道路（4m未満）沿い」は対象になりませんでした。4月からは狭い道路に面したブロック塀（高さが1mを超える）もすべて対象になります。広い道路に面したブロック塀よりも、狭い道路にある塀の方が地震で倒れた時に危険だ、という実態に沿った改善といえます。

助成金はブロック塀1㎡当り2250円、上限10万円です。危ないブロック塀を撤去したいと希望する方は、市役所建築指導課へ問い合わせ下さい。

若手市職員による業務改善の提案

1月31日、市役所の若手職員の皆さんによる「改善力アップ・プレゼンテーションコンテスト」が行なわれ、15チームが発表しました。私もその発表会場に参加し、各チームの研究結果の発表を聞きました。それぞれが日々の仕事の中で、これは何とかならないか？と問題意識をもったテーマの解決方法を研究したものでした。

面白いと思ったものは、「ドローンを使った業務向上計画」。農林水産課の仕事は、林道の保全管理や獣害対策など危険を伴う現地作業があり、この仕事にドローンを使えば安全で正確な作業ができる。さらに耕作放棄地や地形の入り組んだ現場の調査、災害現場や教育、観光分野などに活用を広げていく展望も示されました。

「めざせ！救急車利用満足度日本一」。緊迫した救急現場で、傷病者や家族に対し必要な品物（保険証やお薬手帳、現金など）を携行するようお願いしても、忘れてたり狼狽したりという事態が多い。そこで「手荷物チェックシート」を作り記入することによって、忘れ物を無くし、現場滞在時間の短縮、病院での円滑な診療に役立っています。

各チームとも、持ち時間10分という条件の下での発表を、セリフも工夫し映像やグラフなども活用して、分かりやすく面白く行なっていましたし、市長や副市長が審査員という前でも、自然体で堂々とした舞台度胸でした。

ふだんは議会で部長や課長の皆さんとの付き合いが多く、若い職員さんの仕事ぶりや考え方を見聞きする機会もありませんが、このように市民サービスを良くしようと努力している姿を見て、とても頼もしく思いました。

ずいそう



筒香選手の野球改革提言

プロ野球・横浜DeNAの筒香嘉智(つつごうよしとも)選手の著書「空に向かってかっ飛ばせ！」が評判である。筒香選手は、自分が少年野球・高校野球からプロ選手となった経験を語りながら、野球界そしてスポーツ界に対して、古い固定観念、古い体質を打ち破っていこうと呼びかけている。

夏の甲子園大会の中継を横浜スタジアムのテレビで見ながら、日本人選手は一喜一憂している。「しかし、それを見て外国人選手はいつも苦笑いしているのです。『クレイジー！』150球を投げ続ける投手、スクイズに歓喜する球児を見て、彼らは首をすくめます。日本の夏の風物詩も、世界基準から見れば異端でしかありません。」「勝利至上主義で監督がチームを支配して、学校や指導者の勝ちたいという欲求のために選手を酷使するような『高校野球らしさ』を許すべきではありません。」と、筒香選手は言い切る。

心から野球を楽しむドミニク共和国の選手を見て

筒香選手が2014年、ドミニカ共和国の野球チームに勉強に出かけて感じたのは、「どの選手も心から楽しそうに野球をしている！」自分は「横浜高校からプロの世界に入るまでの間、こんなに笑顔で野球をしてきたことがあっただろうか？」と自問した。

ドミニカの人口は1千万人。それなのにドミニカ出身の野球選手は毎年、150人近くがメジャーでプレーしている！一方、日本人のメジャーリーガーは10人もいない！なぜだろう？日本人の能力や才能が劣っているのではなく、「日本で野球を志す子どもたちが、どこかでメジャーリーガーになる芽を摘まれてしまっている」のではないかと、筒香選手は気がついた。

筒香選手はいま、自分が育った少年野球「堺ビッグボーイズ」、その小学部「チーム・アグレシーボ」で、改革に取り組んでいる。練習時間や練習内容を見直し、子どもたちが自主的に考えて行なう練習にする、「負けたら終わり」のトーナメント式大会を「また明日がんばろう」のリーグ戦方式に変えるなど。今年から夏の甲子園大会も、休養日を2日にするなど、少し改善の兆しはあるが、投手の球数制限などは未だ手つかずである。一日も早く、世界基準を日本の常識にする体質改善が求められている。